

PRRS 対策：ピッグフローの改善によるコントロール事例

(有)サミットベテリナリーサービス 石川 弘 道

はじめに

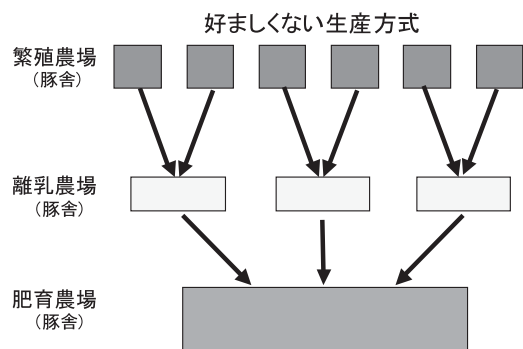
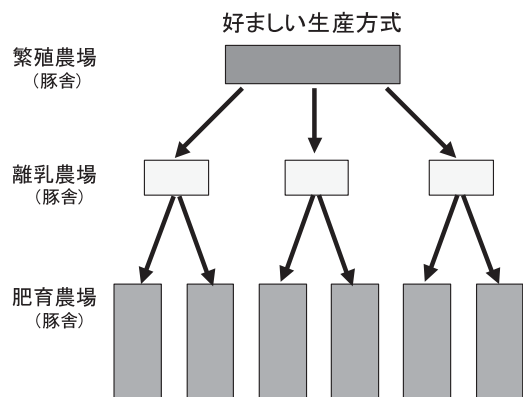
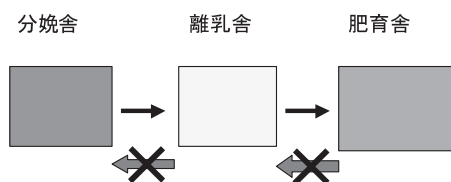
PRRS 対策に限らず、養豚場での疾病コントロールを実施する上で重要なポイントは、オールイン・オールアウトを含めたピッグフローを徹底する飼育管理方式である。オールイン・オールアウトを確実にを行うには、豚の生産の流れ（ピッグフロー）をしっかり守る必要がある。分娩舎で生まれた子豚は離乳後離乳舎へ移動され、その後肥育舎へ移動した後、肉豚として出荷される。母豚は交配舎で交配した後妊娠ストールへ移動後、分娩前に分娩舎へ移動し、離乳後再び交配舎へ戻る。この一連の流れがピッグフローである。豚はこの流れに逆らった移動をしてはいけない。分娩舎で発育遅延子豚を離乳後も分娩舎で飼育したり、戻し里子を実施したりすることは、典型的なピッグフローに逆らった管理であり、厳に慎まなければならない（下図）。

また好ましい生産方式と、好ましくない生産方式があることも同時に理解しておかなければならない。好ましい生産方式とは、繁殖農場はできる

限り1箇所に集約し、その後の離乳舎、肥育舎へ行くに従い分散する生産方式である。反対に好ましくない生産方式とは複数の繁殖農場から離乳子豚が導入され、さらに大きな1箇所の肥育農場へ子豚が導入される方式である（下図）。病気のコントロールの第一歩は繁殖豚の免疫の安定化（または均一化）である。繁殖農場が分散していると、その第一歩である繁殖豚の免疫均一化が達成され

ピッグフロー（豚の流れ）とは

豚の生産段階で発育にしたがった豚の移動（流れ）



ず、常に不安定な免疫状態が継続され、農場内の病気がコントロールされ難くなる。

ピッグフローを改善し PRRS 対策に成功した農場 具体例

ここで紹介する農場は、母豚 1600 頭を飼育する一貫経営農場である。この農場は従来第 1 農場と第 2 農場に分かれており、第 1 農場は母豚 600 頭を飼育し、子豚・肥育までの一貫生産農場であった。第 2 農場は母豚 1000 頭を飼育し、ここで生産された離乳子豚を分娩舎で 40 日齢まで飼育した後、第 1 農場の子豚舎へ導入していた（下図）。第 1 農場と第 2 農場は約 3 km ほど離れている。ここでの問題点は、2 箇所の繁殖農場から 1 箇所の子豚舎へ子豚が導入され、ここで PRRS を始めとする疾病により事故が多発したことである（下表病性鑑定結果）。

そこで 2005 年 8 月から A 農場ピッグフローを次のように変更した。

1. 第 1 農場の母豚 600 頭を第 2 農場へ全て移動し、繁殖農場を 1 箇所集約した（好ましい生産方式への変換）。そのためにストールは増設した。
2. そこで不要になった第 1 農場のストールおよび分娩舎を離乳舎に改造し、第 2 農場から離乳された子豚を第 1 農場へ移動するようにした。
3. そのことにより、離乳舎のオールイン・オールアウトが実施可能となった。
4. 従来 40 日齢で子豚舎へ移動して事故が多発していたが、子豚舎への移動日齢を 60 日齢まで延ばすことが可能になった。同時に子豚舎のオールイン・オールアウトも実施可能となった。

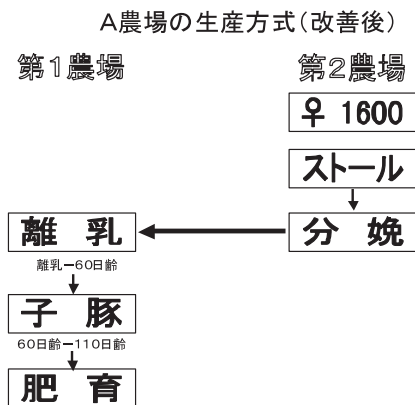
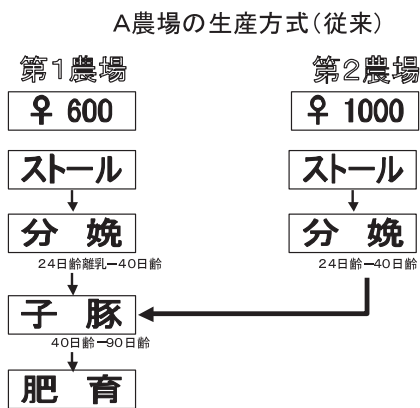
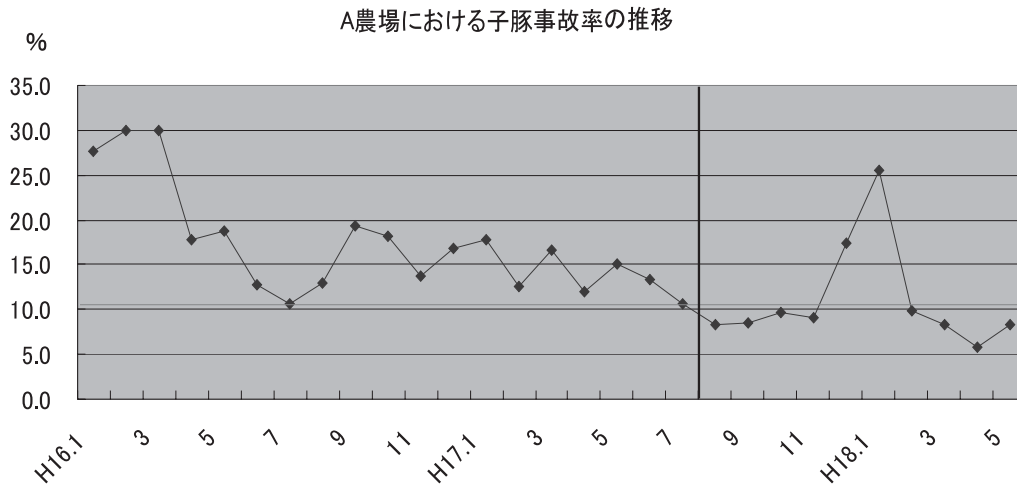


表 病性鑑定結果

2004 年 1 月	PRRS + App
2004 年 3 月	PRRS + マイコプラズマ
2005 年 1 月	PRRS + App
2005 年 4 月	連鎖球菌病
2005 年 6 月	サーコウイルス感染
2006 年 1 月	PRRS (流産)

改善前後の子豚舎までの事故率の推移を次頁の図に示す。ピッグフローを改善し、子豚舎までのオールイン・オールアウトを実施するようになってから、事故率は 10% 以下に落ち着いてきている

PRRS 対策：ピッグフローの改善によるコントロール事例



(18年1月の事故率上昇は浮腫病が原因であった。)

PRRS 対策は繁殖豚の免疫を安定化した上で、オールイン・オールアウトを基本とした飼育管理

が求められます。同時に正しいピッグフローの厳守、好ましい生産方式への取り組みにより、その効果は飛躍的に向上する。